

いる。

- 1° 各問とも retest の方が test のときより少しづつよくなっている。
- 2° test, retest の相関係数は各問を通じて 0.40 ~ 0.85 で、自由回答法、選択肢法、正否法の順で高い。
- 3° 解答の安定性は、自由回答が一番高く正否法が一番低いようである。
- 4° 正答は、正否法が一番低い。

追ってくわしい結果は“統計数理研究輯報”に報告する。

2.3. 学校調査について

青 山 博 次 郎

昭和26年度の研究として、(1) 全国教育課程調査の分析、(2) 質問法の研究を行った。

先ず(1)については既に輯報第5号に報告したが、その概要は次の通りである。

1. 回収は平均して8.5割であつて、無回答校について種々の既存の資料と比較し回答校のみにて分析し得られることを示した。
2. 層別の効果を類型について調べた。
3. 類型に及ぼす各種の条件を分析したが、決定的な要素というものは見られなかつた。
4. 類型を推定するため、各種の条件の数量化の方法を考案した。結論的には観察調査の結果の分析に俟たねばならないこと、未だカリキュラムの評価について時期尚早というよう后ことが考えられる。

次(2)については本年1月より3月にかけて東京都内の中学校2年生を対象とし、知識より態度に至る両極端のものを測定するための質問法についての研究調査を行った。本調査は3部に分れ、第1部は数学に関して完成法、多肢選択法、二項択法法の相違をみるための研究、第2部は社会科を材料として順位法、尺度法、質問位置の研究、第3部は社会的態度を測定するため *Intensity Method* を用いての研究を行った。これと同時に田中氏式知能テストを行い分析の材料とした。

こゝでは予備テスト(世田谷区駒場中学校にて実施)の第1部の結果を紹介しておく。

1. 完成法をA、多肢択法をB、二項択法をCとし、代数の問題3問(各問は5つの小問より成る)を課した。

生徒群を6群に分け、問題順に ABC, BAC, CAB, ACB, BCA, CBA の6種類の問題の組を作った。

2. 各問毎(小問の正答を1点とする)の得は同一形式のものは、差がないので比較には3種類で行った。

それによると第I問(C', B, A) < (C)

第II問(C', B, A) < (C), 第III問(A, C) < (B, C)と

なっている。C' は0, Xの記号外に訂正した答の正否について採点した場合の得点であり○は有意差の存いことを示す。